

留学生と日本人学生の交流促進のための 教育プログラムの設計

根本 直弥 竹田 稔史 山崎 瑞紀

本研究では、留学生と日本人学生を対象とした協同活動（本学の外国人教員を大学 HP 上で紹介するための記事の作成）を考案・実施し、評価するとともに、これらの協同活動が集団間態度に与える効果を検討した。参加前と参加後に互いの印象を測定した結果、日本人学生イメージは「公正な」、「傲慢でない」といった信頼の側面での評価が高まるのに対し、留学生イメージは「好き」、「暖かい」といった感情的側面での好意が高くなる傾向が示唆された。また、日本人学生イメージでは「優れている」が高くなっているのに対し、留学生イメージでは「知的な」が低くなっていた。これらの理由としては日本語を使用する課題内容の関与が考察された。

キーワード：留学生，異文化接触，集団間態度，協同活動，教育的介入

1 はじめに

近年、日本で学ぶ留学生数が急増している。2012 年 5 月現在 137,756 人の留学生が日本で学んでおり、その 90%以上がアジア出身者である [7]。こうした中で、大学においても日本人学生と留学生の接触の機会は増えているが、自然な形での友人関係が形成されにくいという現状を踏まえて、異文化間交流への介入の必要性が指摘されている [2, 9 など]。

東京都市大学環境情報学部のキャンパスにも、留学生が約 50 人在籍している。多くが中国人留学生あるいは韓国人留学生である。しかしながら、留学生と日本人学生の交流は消極的で、授業時や昼食時などに留学生だけで集まる様子が伺え、日本人学生は異文化への関心が低いように見えた。

留学生を受け入れている多くの大学では、留学生を対象としたチューター制度や、留学生と日本人学生の双方が共に学ぶ教育プログラムを導入しており、これらの取り組みへの参加は、交流促進、視野の広がり、異文化交流への不安の低減、コミュニケーションの楽しさへの気づき、相手集団に対する肯定的印象、などをもたらすことがこれまでに示唆されている [3, 4, 5, 8, 11 など]。

そこで、本学部においても留学生と日本人学生を対象

とした定期的なコミュニケーションプログラムを導入し、両者の交流を促すことで、視野の広がりや異文化や異文化集団への意識の変化がもたらされるか、について検討を行うこととする。

昨年度に行った濱田らの研究 [1] では、留学生に対し日本人学生が 1 対 1 で会話をしたり大学生活を支援したりするチューター制度を試験的に実施し、その効果について検討した。結果として、留学生のチューター制度への満足度は高く、留学生、日本人学生とも互いの交流や異文化理解に関して肯定的な評価をしており、互いにイメージが良くなったと回答する傾向があった。一方で、「スケジュール調整の難しさ」や、「何をもって達成したと考えてよいか、わからない」といった「チューター制度の目標の不明確さ」といった問題も見出された。

本研究では、昨年度の研究で明らかになった「目標の不明確さ」といった問題を踏まえ、日本人学生が留学生と 1 対 1 で会話をしたり大学での勉強を支援したりするスタイルではなく、「本学の外国人教員を大学 HP 上で紹介する記事の作成」という 1 つの明確な目標に向けて両者が協働して取り組むスタイルに変更した。また、昨年度のチューター制度ではペアごとの交流に限られていたが、「ペア以外の学生とも交流したい」という要望を受け、全体での会合も何度か開催し、参加している他の複数の学生と交流する機会を設けた。

2 方法

参加者 東京都市大学環境情報学部の留学生 6 名（1 年生 1 名，2 年生 4 名，研究生 1 名，男女内訳は男性 1 名，女性 5 名）と日本人学生 6 名（3 年生 5 名，大学院生 1 名，男女内訳は男性 5 名，女性 1 名）の計 12

NEMOTO Naoya

東京都市大学大学院環境情報学研究所 2012 年度修了生

TAKEDA Toshihumi

東京都市大学環境情報学部情報メディア学科 2012 年度卒業生

YAMAZAKI Mizuki

東京都市大学メディア情報学部社会メディア学科准教授

名。留学生の出身国内訳は、中国 5 名、その他 1 名。留学生は、講義の受講生を教員に紹介してもらるか、知り合いの留学生に呼びかけた。日本人学生は、山崎研究室と他研究室の学生に呼びかけて参加を募った。

実施時期 2012 年 10 月中旬～12 月中旬。10 月 10 日の全体説明会から始まり、12 月 12 日の全体発表会で終わりとする計 12 回のセッションから構成された。全体での交流を多くするため、説明会 1 回、昼食会 2 回、発表会 1 回の計 4 回、全体交流の場を設けた。

手続き 環境情報学部で教鞭をとっている外国出身の教員 5 名（中国 2 名、韓国 1 名、ネパール 1 名、アメリカ 1 名）にご協力頂いた。どの教員の担当をしたいかの希望をもとに留学生と日本人学生が 2～3 名で 1 名の教員を担当した。11 月初旬からグループごとに担当教員の出身地、専門について調べる等、インタビューの準備を行い、11 月中旬に各教員に 40～60 分程度のインタビューを行った。その後インタビューの内容をもとに記事を作成し、12 月初旬に第 1 回目の記事を提出してもらった。スタッフで内容確認をした後、修整した方がよいと思う点があれば伝え、何度かやりとりを行った。途中で 2 回、経過報告を全体で行った後、最終日の 12 月 12 日に作成した記事についての発表会を全体で行った。

記事作成にあたっては、①週に 1 度は会って話し合いを行うこと、②話し合いをしながら記事作成を行うことに意義があるので分担して作成しないこと、③読み手が教員を通して、日本に住む外国人や出身国の人々に親しみや関心を持ってくれるような記事の作成を心掛けること、④研究以外の面について話を聞き出し記事を作成すること、を伝えた。最終回終了後、参加者一人ずつにインタビュー、及び質問紙調査を実施した。

質問紙 ①日本人学生・留学生の互いの印象を測定するための形容詞尺度 10 項目（「親しみやすい (7) - 親

みにくい (1)」「知的な (7) - 知的でない (1)」など）、7 件法、[6]、[10] 等を参考に作成した。②異文化交流意図を尋ねる 3 項目（「異文化についてもっと知りたくなった」、「日本人学生（留学生）ともっと話す機会を持ちたいと思った」、「異文化の人々と交流するのは楽しいと思った」）、③自文化や他文化への気づきについて尋ねる 3 項目（「異なる文化の話を聞いて視野が広がった」、「自分自身や自分の国の文化についてもっと理解する必要があると思った」、「互いに文化の違いを知り、認め合うことが必要だと思った」）、④活動への参加意義を尋ねる 1 項目（「今後こうしたプロジェクトがあったら、また参加したいと思うか」）。②～③は「全くそう思わない (1)」～「非常にそう思う (7)」の 7 件法、④は「そう思わない (1)」～「そう思う (5)」の 5 件法で回答を求めた。その他、感想を自由記述で求めた。①については、プロジェクトの前にも留学生には日本人学生に対する印象、日本人学生には留学生に対する印象について評定を求めた。さらに、全プログラムが終了した後は、参加者 1 人 1 人にインタビューを行い、プロジェクトの問題点やプログラムを通して交流はどのくらい促進されたか、などについて尋ねた。

3 結果

3.1 印象の変化

留学生、日本人学生の印象得点の項目別平均と標準偏差を表 1 に示す。得点が高いほど好印象であることを示している。全体として互いに好印象を持っているが、留学生が日本人学生に対して抱く印象では「公正な」、「傲慢でない」の評価が高くなっているのに対し、日本人学生が留学生に抱く印象では「好き」、「暖かい」の評価が高くなっていた。また、日本人学生への印象では「優れている」が高くなっているのに対し、留学生への印象では「知的な」が低くなっていた。

表 1 印象得点の項目別平均と SD

項目内容	留学生に対する印象				日本人学生に対する印象			
	事前 (n=6)		事後 (n=6)		事前 (n=6)		事後 (n=6)	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD
1)親しみやすい	4.25	0.96	5.00	1.58	4.60	0.89	5.50	1.52
2)繊細な	4.25	1.50	4.00	1.41	4.80	0.84	5.00	1.26
3)知的な	5.50	0.58	4.20	1.10	5.20	0.84	5.17	0.75
4)人が良い	4.75	1.50	5.00	1.58	5.60	0.89	6.50	0.55
5)優れている	4.75	0.96	5.00	1.41	4.40	0.55	5.83	0.98
6)信用できる	4.25	0.96	5.20	1.10	5.40	0.55	6.00	1.10
7)好き	3.25	0.96	5.20	1.64	5.60	1.52	6.00	0.63
8)公正な	4.00	0.82	4.20	1.64	3.80	1.48	5.67	1.03
9)暖かい	3.50	0.58	5.40	1.95	5.80	1.10	5.33	1.37
10)傲慢でない	4.25	1.26	4.80	1.64	5.20	1.30	6.83	0.41

表2 各項目の平均とSD

項目内容	留学生		日本人学生	
	平均	SD	平均	SD
異文化への交流意図				
1) 異文化についてもっと知りたくなった	5.33	1.97	6.40	0.58
2) 日本人学生(留学生)ともっと話す機会を持ちたいと思った	5.83	1.94	6.50	0.58
3) 異文化の人々と交流するのは楽しいと思った	5.83	1.94	6.50	1.00
自文化や異文化への気づき				
4) 異なる文化の話を聞いて視野が広がった	5.67	2.34	6.50	0.58
5) 自分自身や自分の国の文化についてもっと理解する必要があると思った	5.17	2.32	6.25	0.96
6) 互いに文化の違いを知り、認め合うことが必要だと思った	5.67	2.34	6.50	0.58
プロジェクトへの参加意義				
7) 今後こうしたプロジェクトがあったら、また参加したいと思うか	4.67	0.47	4.75	0.43

3. 2 異文化への意識や気づき

異文化や自文化に対する意識の変化を検討するため、異文化への交流意図、自文化や他文化への気づきの項目について、平均値と標準偏差を算出した(表2)。各項目で高い得点となっており、留学生、日本人学生とも、異文化への関心が高まるとともに、自分の国の文化への理解を深める必要についても認識した、視野が広がったと回答していた。全体として、特に日本人学生で高い値が示されていた。活動への参加意義でも、中立的点3のところ平均が4.5点以上と高い評価になっていた。

3. 3 自由記述、及びインタビュー結果

全体として自由記述には肯定的な内容が記述されており、留学生では、「同じ外国人としての先生達の過去を知って、素晴らしいと感じた」、「教員たちは今の成績を達成する前にいろいろ努力したことを感心しました(原文のまま)」など、教員にインタビューしたことで教員の過去の努力を知り、勉強になったといった内容や、「今回のプロジェクトに参加して、先生の事もっと知って、日本人学生との交流も増えて、すごく良かった」といった、教員へのインタビュー経験に加えて日本人学生との交流も有意義だった、といった内容が多く見られた。また日本人学生では、「今回のプロジェクトを通して本やネットじゃ得ることの出来ない生の情報というのを知ることが出来、自分の視野が少し広がったかなと思う」、「留学生たちとも廊下ですれ違うたびに挨拶ができるようになったし、友達が増えて良かった。違う価値観を味わえてよかった」といった内容が記されていた。

参加者に今回のプロジェクトの感想を聞いた後、本プロジェクトで何か問題があったか、あった場合はどのような内容か、どうすれば改善されると思うか、について

話を聞いたところ、「就職活動が始まる時期と重なっており、スケジュール調整が難しかった」、「ペアの相手からメールの返信がなかなか来なくて困った」、「記事制作を行うとき、ペアの留学生からの意見ももっと欲しかった」といった実施時期、スケジュール調整、留学生ペアとの連携といった問題についての言及があった。また、日本人学生とだけでなく、今まで接したことなかった留学生ともっと交流の機会を持ちたかったと述べる留学生もいた。

4 考察

4. 1 印象の変化について

日本人学生に対する印象では「公正な」、「傲慢でない」といった信頼的側面が高まっているのに対し、留学生に対する印象では「好き」、「暖かい」といった感情的側面での好意が高くなっていった。また、日本人学生への印象では「優れている」が高くなってきているのに対し、留学生への印象では「知的な」が低くなっていった。これらの理由としては、プロジェクトにおける留学生と日本人学生の立場や役割の違いが考えられる。本プロジェクトで行った記事作成は日本語の聞き取りや書き取りを用いる課題であり、日本人学生の貢献度が大きくなったと考えられる。そのため、日本人学生では「優れている」、「公正な」といった信頼的側面が高まり、留学生では「好き」「暖かい」といった上記以外の好意が高まったことも考えられる。

4. 2 異文化への意識や気づき

留学生・日本人学生共に、異文化への意識や気づきについて高い評価をしていた。外国人教員にインタビューを行い、来日の経緯、これまでの経験、出身国・文化の

話を聞くことによって、異文化への関心が深まり、日本と他国の違いについて考えるきっかけになったのではないかと考えられる。留学生は、自らと同じ留学生として日本で学んだ経験のある外国人教員の話を聞くことによって、日本での学び方や生き方についての参考になったと、最終インタビューで語る者が多かった。また、留学生と日本人学生が目標を共有し、協同して活動することによって、自然とコミュニケーションが生まれ、異文化への関心が芽生えたことも考えられる。

4.3 今後の課題

インタビューより、「実施時期、スケジュール調整、ペアとの連携、ペア以外の学生との交流」が課題として挙げられた。ペアとの連携に関しては、記事を作成する際に協同して作業を行うように強調はしたものの、記事の作成はパソコンで行うため最終的にはどうしても分担の形になってしまうという問題がみられた。また記事作成の課題は日本語使用という点で日本人学生の貢献度が高くなり、互いの印象変化にも影響を与える可能性があることから、課題内容について検討し、より「協同」の状況を構成する必要があるだろう。

参考文献

- [1] 濱田龍之介・根本直弥・山崎瑞紀：“留学生と日本人学生のためのチューター制度の試験的導入とその効果”，情報メディアジャーナル（東京都市大学），13，pp.117-121，2012
- [2] 加賀美常美代：“大学コミュニティにおける日本人学生と外国人留学生の異文化間接触促進のための教育的介入”，コミュニティ心理学研究，2，pp.131-142，1999
- [3] 神谷順子・中川かず子：“異文化接触による相互の意識変容に関する研究－留学生・日本人学生の協働的活動がもたらす双方向的効果”，北海学園大学学園論集，134，pp.1-17，2007
- [4] 小林浩明：“チューター制度の改善と留学生アドバイザー”，北九州市立大学国際論集，5，pp.53-62，2007
- [5] 松本久美子：“会話パートナープログラム－留学生と日本人学生の相互理解に向けて－”，広島大学留学生センター紀要，11，p.79-93，2001
- [6] 向田久美子・坂元章・村田光二・高木栄作：“アトランタ・オリンピックと外国イメージの変化”，社会心理学研究，16，pp.159-169，2001
- [7] 日本学生支援機構：平成24年度外国人留学生在籍状況調査結果，2013http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/data12.html（2013年2月18日）
- [8] 高橋亜紀子：“日本人学生と留学生とが共に学ぶ意義－『異文化間教育論』受講者のコメント分析から－”，宮城教育大学紀要，40，pp.15-25，2005
- [9] 坪井健：国際化時代の日本の学生，学文社，1994
- [10] 山崎瑞紀・平直樹・中村俊哉・横山剛：“アジア系留学生の対日態度及び対異文化態度形成におけるエスニシティの役割”，教育心理学研究，45，pp.119-128，1997
- [11] 脇田里子：“共同作業による多文化理解教育の実践と課題”，メディア教育研究，4，pp.27-36，2000